

## 新しいスクープ

### 生活報道～事件から癒しまで

毎日新聞生活家庭部・潟永秀一郎

#### ① 事件報道・悪質リフォーム

従来、生活家庭部は事件報道などを扱わない部署とされてきた。が、これは誤った認識。記者が取材活動をしていれば、必ずニュースは捕まる。むしろ生活報道というのは、政治、経済、社会、環境など、新聞社の編集局で最も広い分野を受け持つ。問題意識と取材能力さえあれば、記者が最も力を発揮できる部署ともいえる。

- ・ 端緒は日常の消費者取材
- ・ はらむ問題の根深さ（認知症、独居老人、巨大市場、法の不備、信販……）
- ・ キャンペーン報道（全本社体制の取材班結成）
- ・ 政治と警察の動き（世論の後押し）
- ・ なお残る課題

#### ② 調査報道・地上波デジタル放送

地上波テレビのデジタル化は、官庁では総務省（政治部・経済部・社会部）、業界では放送と家電（経済部・学芸部）、タワー移設や難視聴などの問題は社会部・地方部…など、取材部署が各部にまたがるため、逆に総合的な問題把握が難しいという側面を持っている。また、テレビ局は「推進」の立場にあるため、問題点を報道しない（できない）という、報道のエアポケットに陥っていた。しかし、テレビ視聴はもはや、良くも悪くも生活の一部。ならば生活家庭部の領域と判断し、二十数回にわたって検証報道をした。これも生活報道の醍醐味の一つ。

#### ③ 双方向の取り組み

新聞各面で、購読率が最も高い面の一つが生活家庭面。しかも女性の購読率が高く、男性読者に比べてかなり熱心に読み込み、感情移入があり、反応が返ってくる。テレビがデジタル化で双方向を目指すように、この熱心な読者たちとの交流をしない手はない。それは生活に根ざした報道の役割の一つでもある。

- ・ 毎日かあさん → ああ息子 → ブログ毎日かあさんち（西原理恵子さんを触媒とした「子育て世代」の交流と癒し。サイン会にも参加、年内に交流会も予定）
- ・ 女の気持ち（毎日新聞の名物読者コラム、50年以上毎月続き、読者交流も）

- ・ もう一度食べたい（「食」報道の新しい試み。昭和ブームの中、「記憶の味」を呼び覚まし、読者に代わって探す紙面展開。1回掲載で100通前後のお便り。秩父市はこの企画をきっかけに、幻のサツマイモだった「太白」の特産化を決定。農業の見直しにもつながっている）
- ・ シリーズ「考」（「いただきますを言っていますか」の回では、投書が800通）
- ・ 石田衣良の白黒つけます（人気作家を触媒に、「愛国心教育の是非」「恋しなくなったのは男のせい？女のせい？」など、世相や政治課題などを読者アンケート。1週間で投票は1万件超）
- ・ 「恋したい」（夕刊の新ページ。不倫、社内恋愛、夫婦の性など、これまで新聞が扱ってこなかった分野を紙面化する試み。相談と回答という形をとって、タブー視されてきた領域に踏み込む。「結婚後の恋愛」に関して言えば、男女の意識のずれがくっきり浮かび上がってきた）

#### ④ メディアミックス

ネットや放送は決して、新聞の敵ではない。融合すれば、新聞の信頼性を入り口に、さまざまな試みができる。

- ・ ブログ毎日かあさんち（週間アクセス数30万以上、記者も登場）
- ・ 白黒つけます（毎日インタラクティブと携帯サイトから投票）
- ・ 「いただきます」論争（TBSラジオとタイアップ）

#### ⑤ 女性の視点・ワークライフバランス

部員20人のうち、女性が過半数という編集局唯一の部署。子育て中、事実婚、単身赴任……さまざまな生き方を尊重し、むしろ紙面に反映できる。井戸端会議的なやりとりで、しばしば新しい企画が生まれている（現在、「女性の体と仕事」をテーマにチーム取材中。7月末から連載）。

私は記者に「必ずしも会社に出てこなくていい」と言っている。取材・出稿がきちんとできていれば、場所は関係ない。子どもが熟発し、深夜にメールで原稿を送ってくる記者もいる。退職後の記者も、ライターとして活躍している。産休、育休の取得率も高い。生活家庭部は、記者の働き方の「実験」の場でもある。

# 不要なりフォーム 5000万円

## 認知症の老姉妹 全財産奪われ

埼玉県富士見市に住む80歳と70歳の姉妹が、複数の訪問業者に勧められるまま、この3年間で数千円分のリフォーム工事を繰り返し、全財産を失った。姉妹は認知症を身寄りがなく、家が競売に掛けられて、初めて近所の人気が付いた。調査した建築士によると、大半が不要な工事で、判断能力のない老姉妹が食い物にされた形だ。連鎖を断つため、市が裁判所に競売の中止を申し立て、業者側に対しては、近々債権放棄を求める方針。

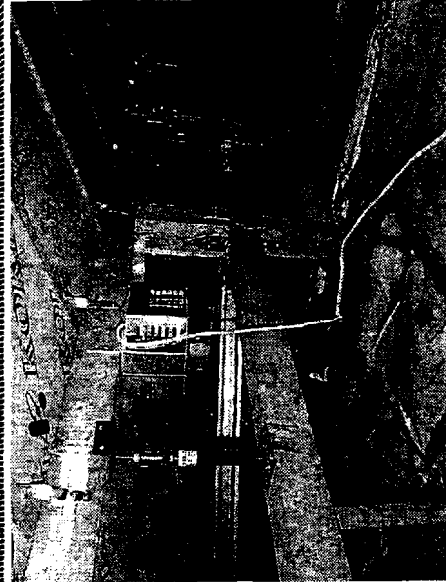
【東京発】

### 群がった14業者

姉妹は、未婚の元公務員と証券会社員。認知症で、今話したことも覚えていないが、ヘルパーなども頼まざるで暮らしてきた。3月には、姉妹宅の購入を勧誘するチラシが配られ、不審に思った近所の人々が市に通報して発覚した。市の調べでは、姉妹に群がった業者と工事額は、契約書などから判明しただけで計14社・約600万円。姉妹には少なくとも4000万円前後の貯蓄があったとみられるが、金額が引き出され、さらに約700万円が不足したため、家が担保となり競売に掛けられた。競売は市からの申し立て、入札締め切り当日、一時中止になった。業者の中には、おむか

### 代金払い切れず 自宅競売まで

11回目で5回、計673万円のシロアリ駆除や「床下調査」などの契約を結んだ会社もあり、最も多い業者は1社で500万円分の工事をしていた。住居のバリアフリー普及に取り組みNPO(非営利組織)「エイズ・ネットワーク」が、市からの依頼で姉妹宅を調べたところ、ほとんどが不要な過剰な工事だった。同ネットワーク理事長で一級建築士の石田隆彦さんは、「最近、お年寄りに必要ないリフォームを勧める悪質な業者が増えて、今回のケースでは、悪質者はますます増強中。見本市。未だ用の調査が庭にまぎれとあって、その無軌道ぶりに憤る。現在、市の消費生活相談員が家から契約書や請



床用の調査剤が敷かれ、各種の補強金具や排気ファンが取り付けられた天井。工務店が提供

### 「埼玉・富士見」

求書などを回  
親を算計した  
記憶がない  
の裏に書いた  
るな契約も  
総額は更に増  
があること  
また契約書  
業者名が違つ  
名が同じもの  
一業者が名義  
約を繰り返す  
あるとみられ  
や悪質者の標  
「高級福祉ホ  
トエール」  
中、弁護士は一  
題を名簿を産  
の被害者に業  
「次々販売」  
増までしゃぶ  
図になってい  
しかし、姉妹  
売にかかって  
理解できない  
が依頼した医  
と診断された。  
民が産科など  
て暮らしてい  
支給日には、  
集金に預れる  
これについて  
が最も多い会  
「姉妹は10年  
病気では思わ  
(受注額)の  
田は多すぎま  
下請けが契約  
で、全部は拙  
かたど契約  
については即  
と書きた。





